

Title	英語の総称文とその時制
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外国語大学学報. 62 p.79-p.94
Issue Date	1983-03-24
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80953">https://hdl.handle.net/11094/80953</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 英語の総称文とその時制

上 野 義 和

### The English Generic Sentence and its Tense

Yoshikazu Ueno

#### § 1. 総称文<sup>(1)</sup>

##### 1-1(1): 名詞句の制限

- (1) Rhinoceroses eat small snakes.
- (2) A rhinoceros eats small snakes.
- (3) The rhinoceros eats small snakes.

一般に、これら三つの文はいずれも「サイは小さな蛇を食べる」という同一の陳述内容をもつ総称文 (generic sentence) と見なされる。それは、サイという動物全体に、「哺乳類であること」、「体がよろいのような厚い皮でおおわれていること」、「鼻の上に一本又は二本の角を持っていること」、「熱帯の湿地に棲息すること」、「性質は凶暴であること」などと同様に「小さな蛇を食べること」が共通して存在する属性であると (少くとも) 発話者には考えられているからである。従って、ある事物全体に共通する属性を陳述しようとする時、その事物を指し示す名詞を文の主語の位置に置かねばならないことになる。これは、ある陳述が総称文として成り立つための第一の統語上の条件である。表層面から見れば、主語として機能する名詞句の中心語が可算名詞である場合、次の三つの形<sup>(2)</sup>だけが許される。

- $\phi$  + 複数名詞
- a + 単数名詞
- the + 単数名詞

これら三つの名詞句は、いわゆる総称数 (generic number) と呼ばれるもので、その名詞が指す事物の種類 (種族) 全体を表わしうる。しかし、(1), (2), (3)と違い、主語の位置以外に生じた場合、それでもなお依然として総称数として機能しうるものは一つしかない。

- (4) John likes rhinoceroses.
- (5)\* John likes a rhinoceros.
- (6)\* John likes the rhinoceros.

(4), (5), (6)はいずれも(真の<sup>(3)</sup>)総称文ではないが、「このサイでも、あのサイでも又、特定のサイでもない、即ちサイという動物全体」という意味解釈を与えるものは(4)のみである。故に、いかなる統語上の分布にもかかわらず、常に総称的意味を持ちうる名詞句は「 $\phi$  + 複数名詞」に限られる。

### 1 一(2): 総称文の内部構造

ある命題、もしくは陳述が総称的であるか否かの判定には、前述したような統語論上の問題も関与するが、それには又、以下に述べるように意味論的考察も加えられねばならない。

次に示す文は、(1), (2), (3)と同様、いずれも総称文として成立する。

- (7) Rhinoceroses are animate.
- (8) A rhinoceros is animate.
- (9) The rhinoceros is animate.

これらの文の命題は「サイは生き物だ」であり、「生き物」であるということは、サイと呼ばれる種族全体にあてはまる、いわばその構成員すべてが共通して持つ属性である。さらに、以下の文も総称文として成り立つ。

- (10) Rhinoceroses are countable.
- (11) A rhinoceros is countable.
- (12) The rhinoceros is countable.

ここで、(7)~(12)の各文の述語 (predicate) の形容詞の部分に注目すれば、ある一つの結論が導き出されよう。それは、サイという動物は生来的に「生き物」であり「一頭、二頭と数えられる」という特長を備えている、ということである。言い方をかえれば、語彙目録にある時点から既に *rhinoceros* には [+ COUNTABLE], [+ ANIMATE] なる素性の記載がなされている、ということになる。このように考えると、総称文とは、主語に選んだ名詞が持つ素性をとり出して、それを述語の中に移しかえる、いわば「重複表現」であるということになる。これを、動詞をその境界に置いた一種の鏡像 (mirror image) 現象と言いかえてもよい。このことは、総称文を非総

称から区別する大きな特長のひとつと考えられる。例えば、次の例を見てみよう。

(13)\* The girl is female.

この文は非文である。それは意味的に変則であるからだ。*girl* が含意する [—MALE] を述部に写し出すことによって [—MALE] = [—MALE] なる関係を敢えて述べようとしているが故に(13)は意味論的に異常をきたしている。以下の文

(14)\* My brother is male.

(15)\* This orphan has no father.

は同様にいずれも非文となる。ところが次の文

(16) She is a girl.

(17) She is a woman.

はいずれもまぎれもなく正しい。両文とも、一見、[—MALE] = [—MALE] なる関係をいわんとするかの印象を与える。しかし、上文中の述部の項には主語の名詞にはない新しい情報が含まれている。*girl* の [—ADULT], *woman* の [+ADULT] がそれである。故に(16)は「彼女は（まだ）大人でない」を、(17)は「彼女は（すでに）大人である」ことを述べている、という点では重複現象をひき起してはいない。

以上、総称文とは「重複陳述」であることを述べた。新しい意味情報が何も含まれていないということから総称文は「分析文 (analytic sentence)」の一種と定義することもできる。

### 1 —(3)：総称の世界

(18) Beavers build dams.

(18)も又、総称文として成立する。しかし、この(18)と前出(7)～(12)の間にはある大きな相異点が存在すると考えられる。(7)～(9)においては「生き物」でないサイは存在しない、ということが主張されている。サイという名の動物がいれば、それらはすべて一匹の例外もなく「生き物」であるという性質を備えているわけである。ところが、他方(18)は、ダムを作らないビーバーが現実存在する可能性を含んでいる。そのような例外的なビーバーが、たった一匹存在するだけで、(18)の陳述内容は偽であるということになってしまう。ところがその逆に、ダムを作る性質を持っていな

いビーバーが現実存在することが判明しても、その動物は依然としてビーバーと呼ばれる生物であることも又、間違いのない事実である。この両方の主張はお互い相容れない矛盾をきたすもののようと思われるが、実はそのどちらもが正しい主張をしているとも考えられるのである。

1-(2)で総称文の内的構造は、主語の位置におかれた名詞が含んでいる素性を述語の中に写し出したものであることを述べた。この定義に従って、(18)の主語 *beaver* にも同様に、述部で述べられている事柄が素性として含まれていると考える。即ち *beaver* [+BUILD DAMS] である。

(19) Lions are friendly beasts.<sup>(4)</sup>

この文を総称文として発話する時、(18)において例外的ビーバーが存在しうる場合よりも、‘friendly’でないライオンが現実に存在する可能性は遙かに高いであろうことは容易に想像されよう。それは、ビーバーがダムを作る属性を持つという観念が人の頭の中にうえつけられている強さの程度が、ライオンが‘friendly’であるとするそれよりも大きいことが一番大きな理由になっているからであると考えられる。しかしながら、現実には、そのような性質を持ちあわせていないライオンがいようとも、(19)の発話者の頭の中では、*lion* という単語の中には、[+ FRIENDLY]という素性がくみ込まれているのである。逆に、(19)のような総称文を偽であるとする人の語彙目録の中には、そのような素性の記載はない。このように考えてみると、前述の一見矛盾した二つの主張は、実は、例外が存在する現実の世界と、総称性が存在する発話者の観念の世界との対立の問題に帰着するのである。レベルが違えば二つの世界はお互いに対立の対象になる資格を欠く。どちらの主張も正しい、というのはこのような意味においてなのである。くり返すが、総称文は、現実の世界での例外的存在物の有無とは関係をもたない、即ち、もう少し積極的な言い方が許されるならば、総称文の内容からはみだすような例外の存在はその総称文の発話者の観念の世界では認められえないのであると言いきってもよい。次の例はこの主張を裏づける証拠となりうる。

(20) A scout is thrifty.

(20)は「ボーイ（又はガール）スカウトは儉約家である」というよりはむしろ「儉約を旨とすべきである」という意味を持つ、いわば‘A scout should be thrifty.’と意味が等価である。ということは、(20)の文はボーイ（又はガール）スカウトの本来あるべき姿を説いた文であって、そうでない例外的スカウトの存在を認めない、もしくはその例外を例外でなくしてしまおう、というような、いわば規範的 (prescriptive) <sup>(5)</sup>な意味を持っている文である。

以上のように考えると、総称文の主語として選択される名詞には、文の発話者の知識や経験の範囲の程度、物の見方や考え方等によって、本来的 (inherent) でない種々の素性がどんどんつけ加えられたり削られていったりするのである。現実の世界で得た諸々の知識が観念の世界で昇華

し抽象的性格を帯び、その結果、現実の世界と遊離してしまうのである。

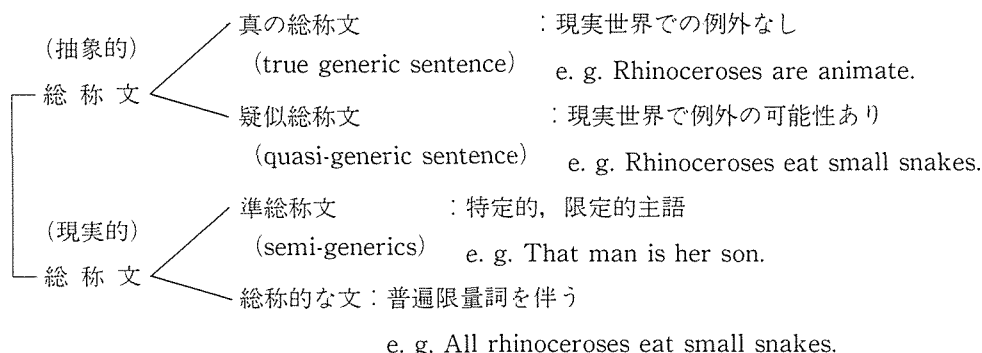
今、仮りに素性を知的 (conceptual, cognitive, denotative) と内包的 (connotative) の二つを基準に分けると、主語の持つ知的素性を述部に写し出した総称文は現実には例外を許さず、内包的素性の場合には例外を許す。この現実の例外的存在の有無を基準にすれば、前者を「真の総称文 (true generic sentence)」, 後者を「疑似総称文 (quasi-generic sentence)」と名付けられよう。次に、普遍限量詞 (universal quantifier) を用いた場合について触れる。まず次の文

$$(21) \left\{ \begin{array}{l} \text{All rhinoceroses eat} \\ \text{Every rhinoceros eats} \end{array} \right\} \text{small snakes.}$$

は、例外なくすべてのサイは小さな蛇を食べる、という意味解釈を許す。英語の母国語話者によると、(22)は(1)~(3)とは異質であるという<sup>(6)</sup>。その原因は、(22)は 'All rhinoceroses in the world eat small snakes.' と等価であるということに見出されるようである。つまり(22)は現実の世界のライオンに言及した陳述だということである。具体的な、このライオンもあのライオンもことごとくそうだと、強く言いきる。それ故、次の例が示すように、それだけで現実の例外的存在を許さない「真の総称文」に、さらに普遍限量詞が伴うと非文になる。

$$(22) \left\{ \begin{array}{l} * \text{ All rhinoceroses are} \\ * \text{ Every rhinoceros is} \end{array} \right\} \text{animate.}$$

これまで述べてきた事柄を整理してまとめてみると次のようになる。



#### 1-(4): 文形式

これまで述べてきた総称文は単文<sup>(7)</sup>, 能動態, 動詞の時制は現在のものに限られてきた。が、それら以外の場合はどうなるのだろうか。例えば次の(23), (24)は明らかに総称文として成立する。

- (23) Beavers are found in Canada.
- (24) The beaver is found in Canada.
- (25)\* A beaver is found in Canada.

(25)が非文であるのは(25)が受動態であることよりも、むしろ不定冠詞の‘a’にその原因があるようだ。勿論これに関しては学者によって意見のわかれるところで、Perlmutter (1968) は(25)を非文とする一方

- (26) A beaver builds dams.

を総称文として正しいとする。これ以上に強い意見を吐くのは Anderson (1973) で、Jackendoff (1971) が総称文として挙げる

- (27) A rhinoceros eats small snakes. I saw it yesterday.

の最初の文はそれ単独で総称的意味を持ちえないことはないけれども、むしろ‘A rhinoceros’には特定の (specific) な意味が感じられ、能動態であっても総称文としては何か不自然である、それ故自分なら ‘There is a rhinoceros (in our garden) (which) eats small snakes.’ と言いかえるという<sup>(8)</sup>。Lyons (1977) は能動文に関しては Perlmutter と同じ考えで、

- (28) A lion is a friendly beast.

を総称文として認めている。いずれにせよ(25)の非文法性と受動態とは一応無関係として論を進める。(23), (24)は、

- (29) Small snakes are eaten by rhinoceroses.
- (30) The small snakes are eaten by rhinoceroses.

とは基底においてかなり違ったものであると考えられる。(23), (24)は統語的には受動形態で表わされてはいるものの、その背後には beaver [+ live in North America and Europe] の如き情報が隠されていると考えてもよいのではないだろうか。ところが(29), (30)には、あるとすれば、small snake [+ be eaten by rhinoceroses] のような情報があると考えねばならない。‘small snake’ という名詞句を特別に辞書項目として記載しなければならない上、「サイに食べられる」という、

相手まかせの一方的な受身的な情報が、ことさら ‘small snake’ の属性とは考え難い。確かに(29), (30)の ‘small snakes’ 及び ‘rhinoceroses’ は、それら自体は「総称名詞」であろうが、陳述全体が主語の名詞の指す事物全体の属性を述べた総称文にはなりえないのではないかと考えられる。以上のことから、総称文の主語に選ばれる名詞は、それが持つ素性が受動的であって、その資格がないといえよう<sup>(9)</sup>。

## § 2. 総称とその時制

### 2 —(1) : 総称文

通例、総称文の動詞の時制が現在形以外の形で表わされることはない。例えば次の文、

(31) Lions have been mammals for as long as I can remember.

は総称的解釈を許すのに現在完了形が使われている。が

(32)\* Lions have been mammals for 3700 years.

が非文であることから、Hofmann<sup>(10)</sup>は(31)は、およそ、次のような構造

(33) It, that lions are mammals, has been (true) for as long as I can remember.

から派生したものと考え、総称文の動詞の時制は現在形でなければならないことが証明されている。

動詞が現在形であるという点においては、総称文と非総称文が表層上区別がつかない時がある。次の文

(34) The horse is useful.

は二つの意味解釈を許す。現在時を示す「時の副詞」の ‘now’ を(34)に付加し

(35)\* The horse is useful now.

と非文になれば(34)は総称文、



## (36) The horse is useful now.

と正常であれば(34)は非総称文の読みができるところから、総称文は深層において無時制であるという考え方が成り立つ<sup>(41)</sup>。「馬は役立つ」という陳述は、ある限定された時点においてではなくて常に真理であるということ、即ち時間を超えたものであることを意味する。このことは1—(3)で述べたように、総称文の陳述内容は現実の世界とは無関係の抽象的、観念的世界に言及するものである、ということから当然導き出されることである。故に、動詞が現在形であることは、形態上ただそうになっているだけのことであって現在時の事態にのみ言及しているからではない。そこで、「虚偽時制」という言葉がそれにあてられる。

ところが、このように深層において無時性と考えられる総称文の動詞が過去形となって現れることがある。

## (37) Faint heart never won fair lady.

この‘won’は、いわゆる「総称過去 (generic past)」と呼ばれるように、(37)は単なる過去の出来事を述べたものではなく、それから後も起ることを含蓄した一種の時間を超えた意味 (= 弱気で美女を得たためしがない) を持ってはいるものの、発生はあくまでも過去の出来事に由来し、それが人の口にのぼるにつれて定まった表現としての地位を得、諺として認められるようになったものと考えられる。ところが次の文は明らかに総称文である。

(38) The<sup>(12)</sup> dodo was a bird.

単純過去の文と違い、(38)には状態の変化を示す表現を付加できない。

## (39)\* The dodo was a bird, but it isn't any more.

## (40)\* The dodo used to be a bird.

故に、(38)の文は「dodo は以前は鳥であったが、今ではその属性が変化してしまっている」ことを表わすものではない。「dodo は鳥である」という事実は(38)をいつ発話しようが不変である。その過去形は、dodo の生存の時期を表わし「過去において存在したが今は絶滅している」ことを意味している。このことは次のような質問が異常であることから裏づけられる。

## (41)\* When was the dodo a bird?

Anderson は、以上のような現象を説明するのに次のような仮説をたてる。総称文はその深層構造においては時制を含まない。(38)の如き総称文の動詞の過去形は、主語の名詞が含む過去時素性[+past]が変形規則によって動詞にコピーされることによって生ずる。この仮説によると、(38)は、およそ、

(42) The existing-in-the-past dodo be a bird.

に相当する基底構造から派生される。このように過去に存在した dodo のもつ過去時素性が動詞 be にのり移る現象を Anderson は Ghosting (幽霊化) と名づける。

さてここで、主語の名詞に過去時素性 [+past] が含まれているという Anderson の主張をどう考えるべきか。この主張は、確かに、例えば Fred が故人で主語の位置に生ずる

(43) Fred was Mary's uncle.

の 'was' や、分裂文 (cleft sentence) や疑似分裂文 (pseudo-cleft sentence) において主語の名詞句を構成する関係詞の時制が過去である場合、述語動詞の be も次のように

(44) It was Barbar who came last week.

(45) The one who came last week was Barbar.

過去形で表わされる現象を説明しうる。R. Lakoff (1970) の言う、いわゆる虚偽時制 (false tense) の説明に有効なのである。しかしながら

(46) Fred is dead.

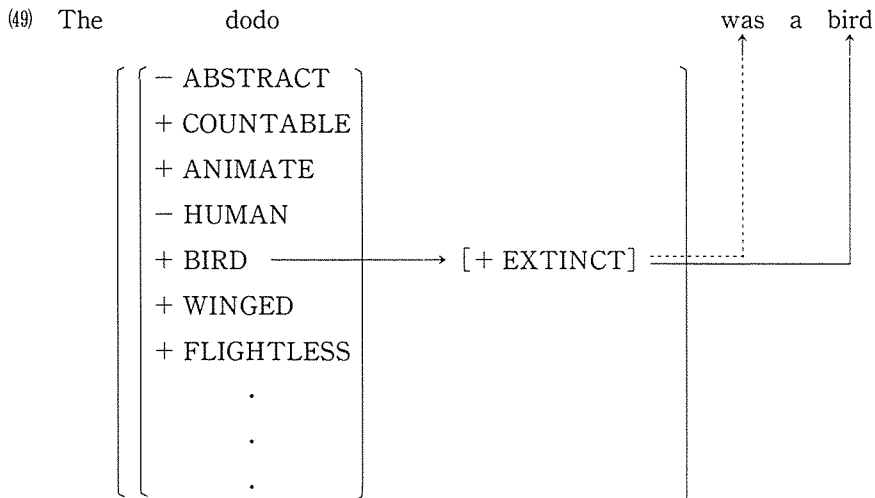
(47) The one who came last week is dead.

や、Perlmutter (1968) や Lyons (1977) が総称文の例としてあげる

(48)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{The lion} \\ \text{The beaver} \end{array} \right\}$  is extinct.

における be 動詞の現在時制をどのように説明するのだろうか。Anderson は(46)を例にとり、ある項の存在状態が述部に示されるとその項には存在状態は備わっていない、故に(46)の Fred の基底

にある‘N’には、存在うんぬんという情報は含まれていなくなるのだ、と述べている。そう言われれば、確かにそうである。しかし、それでもなお、筆者にとって、すべての名詞に時間素性が含まれているという主張には少し飛躍があるように思われる。まず、すでに絶滅してしまって現在では存在しないものを指示する名詞を例にとって論を進める。(38)のような文を発話する時、その話者の頭の中には *dodo* は死滅しているという知識が存在する。そして又、前述したように総称文は主語の名詞が含む素性を述部に写し出した、一種の鏡像のような内部構造を持っている。従って *dodo* には「死滅している」という素性が含まれていることになる。仮りにそれを [+EXTINCT (NOW)]<sup>(14)</sup> と表わす。勿論、他の素性、知的素性は言うまでもなく内包的素性も同様に *dodo* に含まれる。図で示せば次のようになる(但し、[+EXTINCT (NOW)] はその鳥が死滅した時点において初めて誕生した特殊なものである故、他の素性とは区別して表記する)。



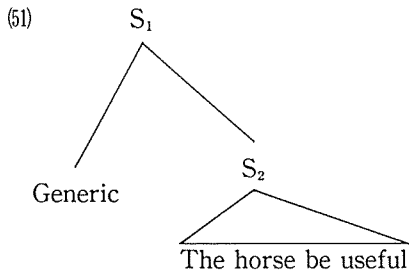
(38)が発話されるに至る過程は次のように考えられる。まず、*dodo* という名詞を主語に選択する、次にその名詞が含む素性のうち [+ BIRD] をとり出し、それを ‘bird’ と具現し述部の項にする。その際、とり出される素性は必ず [+EXTINCT (NOW)] にぶつからねばならない<sup>(15)</sup>。次に連結辞が登場し<sup>(16)</sup>、先にぶつかられて名詞から押し出されていた [+EXTINCT (NOW)] が過去時制を示すものとなって連結辞と結合する。

次に、素性の表記について少し触れておかねばならない。総称文の動詞の時制は現在か過去かいずれかでなければならない。そして両形は自由変異を成すものではない。主語の名詞に「死滅している」という特殊な素性が含まれていない限り、通常現在形の動詞を用いるのが総称文の自然な姿である故、現在形を無標 (unmarked)、過去形を有標 (marked) と指定することにする。さらに次のように、

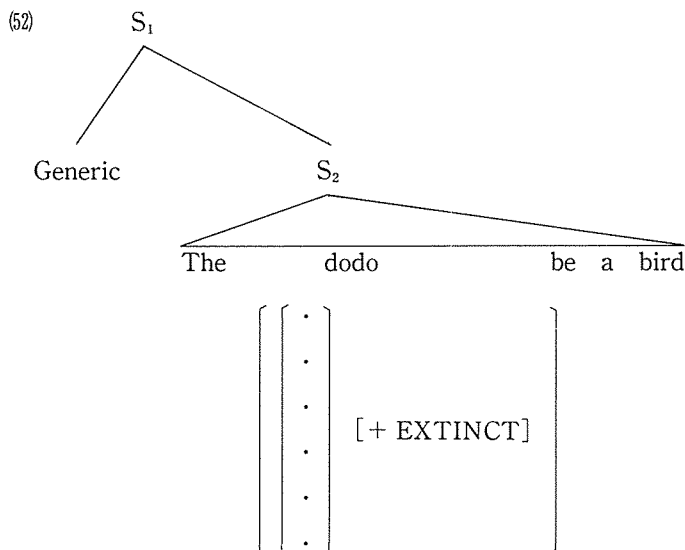
(50) Unicorns have a horn.

現実に存在しない架空の事物を指す名詞が主語になる場合にも現在形が使われるからでもある。よって、*dodo* などには [+ EXTINCT (NOW)] が表記されるが、*beaver* や *unicorn* などには [− EXTINCT (NOW)] は表記されない。

次に、[− EXTINCT (NOW)] が表記されていない時は動詞は自動的に現在時制を持つことを規定しておけば、例えば、(49)と(50)の時制の違いを説明できるが、これだけでは前述した(34)のもつ二つの意味解釈の相違を説明できない。総称的意味解釈をするなら、その情報をどこからうけとらねばならない。変形は意味解釈に関与しないという仮定に基き、深層構造に命令形態表(= Imp)が生じうるようにして、命令文は基底においてこの形態素が選択された時に必要な操作が行われて生成されと考えられるように、総称文の読みをする場合にはその基底構造において、総称形態素のようなものが生ずる、と考えられるのではなかろうか<sup>(17)</sup>。この仮説に基けば、(34)が総称文として発話される時、その基底には次のような構造が存在することになる。



主語の 'horse' には [− EXTINCT (NOW)] は表記されておらず、総称形態素の 'Generic' が 'be' を '現在形' として具現させる役目を担うことになる。同様に、(49)も次のように書き改められる。



図で示されているように、‘Imp’ や文修飾副詞の役目と同じように総称形態素は文全体に総称的読みを与えるのである。

以上に述べた仮説に従えば、(48)のような文は次のように説明される。主語の名詞が指す動物が「死滅している」という仮定に基いた次の文

$$(48) \left\{ \begin{array}{l} \text{The lion} \\ \text{The beaver} \end{array} \right\} \text{ is extinct.}$$

においては、主語の名詞は [+ EXTINCT] を含んでいる。(52)に示されるように、本来なら動詞の時制に関与するこの素性そのものがとり出され述部に移されてしまい、‘extinct’ として具現されてしまったが故にもはや元の場所に存在していない。ところが(48)の基底に存在している総称形態素の影響で ‘be’ 動詞は現在形で表わされることになる。

## 2 一(2): 準総称文

前出した以下の文

(4) John likes rhinoceroses.

(43) Fred is Mary's uncle.

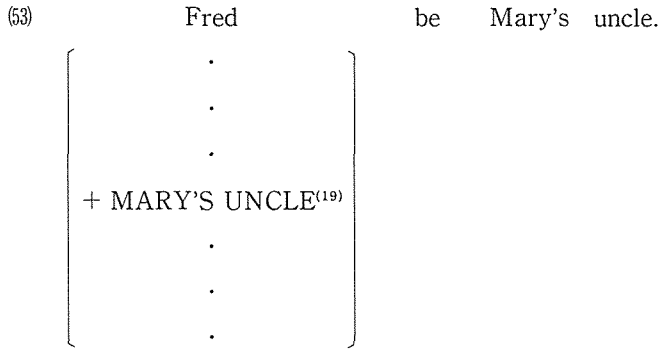
は、総称文と共通する点が多い。例えば、John, Fred が生きている人間である場合、動詞は現在形でなければならない。又、時の副詞句を付加すると、以下の如く、

(4)' \* John like rhinoceroses just now.

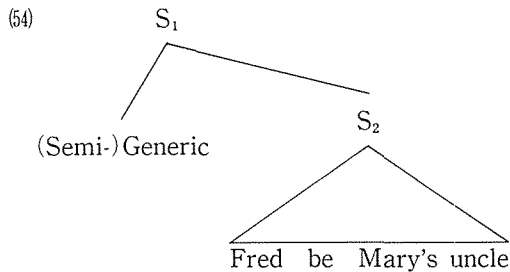
(43)' \* Fred is Mary's uncle just now.

非文になる。その理由は、現在（発話時）を中心にして、(4)は過去から未来にかけてその状態が不定の期間続いていること<sup>(18)</sup>を表わし、他方(43)は二人の人間の続柄が未来永劫続くことを表わしていることにある。(4), (43)が総称文と異なる点は、ただ(と言っても実は最大の相違点なのだが)主語の位置にある名詞が限定的（又は特定の）であるかないかということにある。とすれば、準総称文も総称文とよく似た内的構造、基底構造を備えているのではないかと推測される。(43)の文を例にとると、この文の発話者の頭の中では次のような作業が行われていると推定される。ある人間の男性を指し示す Fred を主語に選ぶ、次にその Fred が含む「Mary の uncle」という属性をとり出し述部に置く、次にその二つの項をつなぐ連結辞を選ぶ、発話時において Fred は生きてお

り、その二人の人間の関係はその時点を中心にその前後に不定に延びているということを意識する。このような過程を経て(43)が生み出される。このような想定は、(51)の図に関して述べられた総称文の生成過程と大変似ている。従って(43)の文も次の如き基底構造を持つと言えよう。



MaryにもFredとの続柄を示す属性が含まれていて、Maryが主語に選ばれるとその属性が述部に写し出されることになる。さらに、(53)の背後には次のような構造があると考えられる。



(43)に関して、もしFredが故人である場合、

(55) Fred was Mary's uncle.

のように動詞を過去形にしなければならない。その理由は、(49)で示されたのと同様に、'Fred'が含む [+ EXTINCT (NOW)] が述部に移される素性 [+ MARY'S UNCLE] に押し出され過去時制に姿を変える、ということにある。次に示す文

(56) Fred is dead.<sup>(20)</sup>

も、(48)の場合と同じように説明される。'Fred'が含むと発話者が意識する [+ EXTINCT (NOW)]

が述部に‘dead’として移し出された結果、もはや動詞の時制に関与する素性が主語の名詞中に存在しておらず、その代り(準)総称形態素がその代りを務め現在時制を生み出すことになる。

## 2—(3): まとめ

この小論の主張するところは

- (1) (準)総称文の内部構造は、話し手の文法という点から論じられねばならず、
  - (2) 又、その内部構造が、表層の過去時制とどのように関係しているか、
  - (3) (Anderson の言う [+past] を認めるにしても、その前提となるような) 素性 [+EXTINCT (NOW)] が、(準)総称文の読みを与える形態素とからみ合って、表層構造を生み出す、
- ということである。

## 注

- (1) 以下の論述は Ueno, ‘On the Generic in English’ (*Journal of Osaka University of Foreign Studies* (Linguistics) 1982) の内容と一部重複するところがある。が、そこで紙面の都合上言い足りなかった点を補足すること、及び英語の総称文における時制の出所とその処理の一方法の提案がこの小論の目的である。
- (2) Jespersen (1931. Part IV) は ‘the + 複数名詞’ も総称文の主語になりうると言うが、広く容認された用法ではないようである (Stockwell et al. 1973)。
- (3) ‘John’ という限定された人間に関する陳述であるという点では総称文と呼び難いが、命題が表わす事態が発話時を中心にしてその前後に不定に延びる時間にわたって事実として存在する、という意味では総称文と似かよっている。それゆえ、Anderson (1973) はこのような文を準総称文 (Semi-generic sentence) と呼び、又 Lawler (1973) はこのような文の動詞を総称的動詞 (generic verb) と名付けている。又、英語の母国語話者によれば、(6)のサイは限定的なサイと解釈され、(5)のような文は英語には存在しないが無理な解釈をすれば ‘John would like to have a rhinoceros.’ だという。
- さらに、これら三つの形の名詞が主語の位置に生じたとしても ‘the + 単数名詞’ にはある種の制約があると言う学者もいる。Quirk 等 (1972, p. 148 Note) は、非限定的な形は ‘もし存在するとすれば (if they exist)’ を、限定的な形は ‘現存している (extant)’ を意味するように思われると述べ、次のような例を挙げている。
  - (a) Dwarfs are a popular theme in literature.
  - (b) Hobgoblins are a popular theme in literature.
  - (c) The dwarf is a popular theme in literature.
  - (d) The hobgoblin is a popular theme in literature.
 (c) が全く正常な文で、(d) がそうでないのは、*dwarf* は現存する生物(小さい人間)という意味を持つが、*hobgoblin* は架空の生物(いたずら好きの小鬼、お化け)の意味であるから。この主張は ‘ $\phi$  + 複数名詞’ の総称名詞句としての機能の広さをより一層強く示す証左になる。
- (4) Lyons (1977. 1. p. 194) からの引用例。
- (5) Nunberg & Pan (1975)。
- (6) 数人の母国語話者から得た回答である。又 Anderson (1973) は、(21) は真の総称文ではないがそれに近い (close to) ものだという。

- (7) 単文以外の形式をとる場合については Ueno (1982) 参照。
- (8) 'a' に原因があることはもちろんだが、⑦の二番目の文が現実世界の出来事に言及したものであるが故に、第一の文の総称性がその影響をうけて薄められてしまっていることも事実であろうと思われる。
- (9) Perlmutter (1968) は次の二文を総称文と認めている。
- (a) Dams are built by the beaver.  
(b) Dams are built by beavers.
- しかし、本論に述べたものと同じ理由で *dam* に [+ be built by beavers] が含まれているとは考え難い。やはり、Jackendoff (1972. pp. 309—310) は、
- (c) A rhinoceros eats small snakes.
- の 'A rhinoceros' と
- (d) Small snakes are eaten by a rhinoceros.
- の 'a rhinoceros' は意味が違うから、文の意味解釈は表層で行うべきだ、と主張しているように、(a), (b), ⑨, ⑩も表層構造のみで意味解釈をすべきであろう。
- (10) 『助動詞』(pp. 131—132) を参照。
- (11) Anderson (1973)。
- (12) 'The dodo' の代りに 'a dodo' とすると総称文としては成り立たない。動詞が過去形になると不定冠詞の 'a' は「特定の」の意味を帯びる。Cf. Perlmutter (1968), Ueno (1982)。又 Perlmutter は
- (a) The beaver is extinct.  
(b) Beavers are extinct.  
(c)\* A beaver is extinct.
- と言い、Lyons (1977) は
- (d) The lion is extinct.  
(e)\* A lion is extinct.
- と判定していることから、「絶滅している」という特長をもつ生物・事物が不定冠詞を伴うと、動詞の時制が現在であれ過去であれ、総称文の主語にはなれないと考えられる。
- (13) Cf. Lyons (1977), p. 194, Anderson (1973)。
- (14) この 'NOW' は 'right now' ではなく、存在することをやめた時点以降の時間を示す。
- (15) この主張は、ある素性を選び出す時、発話者の頭にはその素性と共に「死滅している」という事実が同時に意識される、という仮定に基く。
- (16) be 動詞が基底にあるか変形で導き出されるかはここでは問題としない。
- (17) Cf. Ueno (1982)。
- (18) Leech (1971, pp. 1—2) の言う 'unrestrictive use' に相当する。
- (19) Leech (1974, pp. 232—262) が提唱するような、親族関係の普遍的な表記をしなければならないかもしれないが、ここでは親族関係の分析が目的ではないので敢えて簡単に表記する。
- (20) 次の文が非文であることから、⑤は準総称文の資格を備えていると考えられる。
- (a)\* Fred is dead just now.  
(b)\* Fred was dead, but he isn't any more.

## 参 考 文 献

- Anderson, J. 1973. 'The Ghost of Times Past' in *Foundations of Language* 9—4.
- Araki, K. et al. 1978. *Jodoshi*, Kenkyusha, Tokyo.
- Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles* Part IV, Copenhagen, Munksgaard.
- Lakoff, R. 1970. 'Tense and Its Relation to Participants' in *Language*.
- Lawler, J. M. 1973. *Studies in English Generics*, Ann Arbor, Michigan.



- Leech, G. 1974. *Semantics*, Penguin Books, Harmondsworth.
- Leech, G. 1971. *Meaning and the English Verb*, Longman, London.
- Lyons, J. 1977. *Semantics* 1, Cambridge University Press.
- Nunberg, G. & Pan, C. 1975. 'Inferring Quantification in Generic Sentence', in *CLS* 11.
- Perlmutter, D. M. 1968. 'On the Article in English' in *Recent Developments in Linguistics*, ed. Bierwisch and Heidolf 1970, The Hague, Mouton and Co.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Stockwell, R. P. 1973. *The Major Syntactic Structures of English*, Holt, Rinehart & Winston, New York.
- Ueno, Y. 1982. 'On the Generic in English' in *Journal of Osaka University of Foreign Studies* 56 (Linguistics).